

## (1. 書評論文)

### 1-4. 中国人留学生の異文化適応に対する社会学的考察

——留学生ネットワークに着目する——

葛文綺『中国人留学生・研修生の異文化適応』

(溪水社、2007年)

周 宇磊

#### 1 はじめに

2008年、日本政府はグローバル戦略の一環として、2020年を目途に30万人留学生受け入れを目指す「30万人留学生受け入れ計画」を実施した。留学生の受け入れを通して、文化交流や国際協力を促進し、日本の国際的な人材の強化と知的国際貢献などの役割を果たしてきた。しかし同時に、異なる文化と属性を持つ留学生は日本に滞在し、生活する期間に様々な問題も抱えている。その中でも注目されているのが、留学生の異文化適応問題だ。

本書は異文化適応と留学生研究を専門とする葛文綺が名古屋大学大学院教育発達科学研究科に提出した博士学位論文に加筆、修正を加えたものである。その内容は、「留学生十万人計画」による来日留学生の急増を背景にして、中国人留学生を対象として取り上げ、留学生の個人的側面から着目したものである。

本書が刊行されたのは2007年であり、2008年の留学生受け入れ計画の変更以降の状況と異なる部分がある。それにもかかわらず、評者が本書を書評の対象に選ぶ理由は二つある。第一の理由は、本書の刊行以降に、中国人留学生を特化し、異文化適応問題だけを取り上げて分析し、考察する書籍がないことだ。そして、第二の理由は、中国人留学生の個人属性と留学動機から異文化適応問題を捉える着眼と来日前後の対日イメージ変化の比較分析が今日においても有効だと考えられることだ。

評者自身もまた、当事者として、近年における外国人留学生、とりわけ中国人留学生の中には、来日年数が長くなるにつれ、日本人との交流が減少するケースがあることを実感している。一方、留学生は独自にグループを作り上げ、彼らはその集団の中で生活を完結する傾向がある。このような現象について、評者は大きな関心を持って研究を進めている。

日本に在学している留学生の異文化適応問題に関する書籍としては、2000年に刊行された田中共子『在日留学生の異文化適応：ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から』と2013年に刊行された原田登美『留学生の動機とホームステイ：ソーシャル・サポートによる異文化適応へのプロセス』があるが、タイトルに示されているように、必ずしも中国人留学生だけを取り上げたものではない。対して本書は対象を中国人留学生の異文化適応問題に特化

しており、これが先述したほかの書籍とは異なる独自の点となっている。

日本における外国人留学生の異文化適応に関する研究の多くは、ソーシャル・サポートやパーソナリティといった個人的な面から着目する研究であり、留学生を一つの集団として捉え、その集団の形成（留学生ネットワークへの埋め込み）と影響から留学生の異文化適応問題を考える研究は乏しい。本稿は葛文綺『中国人留学生・研修生の異文化適応』の書評を通じて、中国人留学生同士がグループ集団を形成して生活を完結するという事象を、以下の三つの観点から論じる。(1) ホスト社会マジョリティと異なる異質集団としての留学生が持つエスニック・アイデンティティの影響 (2) ホスト社会に移住する初期段階に外部環境が移住者の人間関係とその親密性の影響 (3) 情報化社会の発達による交流の閉鎖性。

本稿の構成は以下のように展開する。第2章では、対象書籍の概要を紹介する、第3章では、対象書籍の意義と研究の有用性を評価する、第4章では、対象書籍の課題を提示し、議論する。そして最後に第5章では、中国人留学生の異文化適応研究に関する今後の課題と方向性について議論する。

## 2 本書の構成

本書は全5章によって構成されている。各章の概要は次の通りである。

### 2.1 第1章——研究的理論背景と目的

第1章ではまず、研究動機と研究背景が述べられ、異文化適応およびそれに関連する異文化コミュニケーション、カルチャーショックの概念が説明される。著者は適応に成功し、カルチャーショックを起こさないことを異文化適応と捉え、逆に適応に失敗し、カルチャーショックを起こすことを異文化不適応と捉える。その際、適応要因を文化的・社会的要因と個人的要因の両方から把握する視点を提示している（本書：11）。次に、従来の留学生および研修生の異文化適応に関する先行研究が整理され、これまで多くの研究が留学生や研修生の出身地域を限定しなかったため、一致した結果が得られにくいことが指摘される。このような問題意識のもと、著者は研究対象を中国人留学生と研修生に限定する重要性を指摘し、その文脈をそって研究することの意義を主張している。

### 2.2 第2章——中国人留学生の異文化適応

第2章では、中国人留学生の異文化適応と個人属性の関係に着目し、その適応と個人属性の関係が、以下に示す二つの調査方法から明らかにされる。(1) 中国と他国の留学生の個人属性の違いが適応程度に与える影響を測定するための質問紙調査。(2)、中国人留学生の特徴をより明確にするための半構造化インタビュー。

質問紙調査では、「精神的健康」、「対日感情」、「対人関係」、「日本語力」を適応指標として用いて、留学生の個人属性が比較される。その結果、他国の留学生と比べ、中国人留学生は対

日感情がネガティブであると同時に対人関係、言語的コミュニケーションの両方において、より大きな問題を抱えていたことが明らかにされている（本書：35）。また、半構造化インタビューの結果、中国人留学生の特徴が、(1) 来日の経緯と目的が複雑である、(2) 経済的問題に悩む学生が多い、(3) ホスト国の人々と交流する機会が少ない、の三点にまとめられている（本書：68）。

### 2.3 第3章——留学前後における対ホスト国イメージの変化に関する研究

第3章では、まず、来日中国人留学生および訪中日本人学生が互いに持っている対ホスト国イメージに関する比較を行うことによって、実際の留學生活が対ホスト国イメージを与える影響について検討される。

著者は異文化適応を考えたときに、留学生が持つ対ホスト国イメージのみではなく、受け入れ側が留学生の出身国をどのようにとらえているのかも両者の相互作用に大きな影響を与えると説明している（本書：72）。具体的にイメージの変化に影響を及ぼす要因については、半構造化インタビュー調査から明らかにされている。

著者は「勤勉性」、「親和性」、「先進性」の三つをイメージ尺度として設定し、日中学生両方に対して考察した結果、日中学生両方とも、留学後は留学前よりも、互いにホスト国の先進性と勤勉性への評価が低下していたものの、親和性に関しては変わりがないと説明している（本書：79）。さらに、著者は半構造化インタビュー調査を通して、上述した結果に影響する最も重要な要因として、留学前のホスト国に対する抽象的で表面的なイメージが、留学後により具体的、客観的になったことを指摘している（本書：84）。

### 2.4 第4章——中国人研修生の対日イメージおよび適応に影響を与える個人属性

第4章では、中小企業の労働力補充という目的で来日している中国人研修生を研究対象にして、前章と同様に対ホスト国イメージと適応との関係が把握される。そして、中国人研修生と留学生の対日イメージおよび適応を比較し、両者のプロセスが明らかにされる。著者は、中国人研修生が直面する最大な問題は日本語であり、日本語能力が高いほど、日本の「先進性」、「親和性」、「勤勉性」を高く評価する一方、逆の場合は低く評価する傾向があることを明らかにしている。また、留学生と比較する結果、研修生が留学生と比べて非常に狭い人間関係しか持てない環境に置かれていると指摘し、研修生は留学生よりも適応程度が低いことも明らかにしている（本書：110）。

### 2.5 第5章——総合的考察

第5章では、本書の内容がまとめられ、その意義と今後の課題が述べられている。著者は本書が留学生、とりわけ中国人留学生の異文化適応研究に寄与できる点としては、以下の三点を述べている。(1) 留学生の出身地域と文化の違いによって研究対象を限定し、留学動機と要因に注目することで、中国人留学生が置かれた状況と直面する問題を明らかにしたこと。(2) 中国

人留学生は来日後、来日前に比べ、日本に対するイメージがネガティブになっていることを検証したこと。(3) これまでの研究で重視されていない研修生を取り上げ、彼らが限られた人間関係の中にしか生活していないことや、ほとんどどの研修生は日本語能力が低いという結果から研修生が置かれた生活環境と現行制度の面の見直しが重要であると指摘したこと。

一方、本書の課題として研究対象の限界性が指摘されている。本書では国公立大学の学部生と大学院生のみしか取り上げておらず、学力不足によってやむをえなく私立大学に進学する多くの留学生の実態が十分に明らかにされていない。著者は奨学金制度が充実している国公立大学は私立大学と大きな違いがあり、留学生の適応程度にも違いがある可能性を論じている。また、研修生の適応研究に関しては、これまでの研修成果は皆無であるため、本研究においてもデータの不足の原因も含め、満足できる結果が得られたと言い難いと述べている。

今後の課題として著者は、(1) 居住や在籍身分の側面から対人関係対する検討、(2) 私立大学の中国人留学生に対する研究、(3) 対ホスト国イメージがポジティブになるようなソーシャル・サポートを実施する必要性、の三点を指摘している。

### 3 本書の意義と評価

本書が刊行されたのは2007年であり、現在の来日留学生と異なる状況があると考えられる。しかし、著者が提示した研究の着目点と研究方法は留学生を取り巻く社会背景が幾分変容した今日においても適応できると考える。本書は外国人の異文化適応に関する多くの研究の中でも、中国人留学生を対象に適応問題を多面的に捉えた優れた研究である。以下で、本書の意義を3つの点から整理する。

#### 3.1 研究対象の出身地域の限定

本稿の冒頭で述べたとおり、本書は留学生の出身地域を限定し、文脈をそって研究を進めている。出身地域の違いは文化の違いを意味すると同時に、それぞれの国の状況によって来日する留学生の個人属性も異なることを意味する。そのため、出身地域の限定は、異文化適応を適切に把握する研究方法だと評者も強く同意する。

留学生の個人属性が異文化適応にどのような影響があるか。著者は、欧米系の留学生の多くは日本文化や日本語教育などの面に大きな興味を持って来日したのに対して、中国人留学生は純粋に日本文化に触れたいという理由で来日する学生は少なく、大半はもっと複雑な理由を抱えていると指摘した(本書:68)。また、他の論者もこれに関連する重要な指摘をしている。たとえば、青木保は、戦後日本はアメリカ文化の影響を受け、欧米文化に好意を持つ一方、中国や韓国、東南アジア諸国などの自国より発展が遅れている国に対して軽蔑に思う傾向を指摘している(青木 2001)。実際に、欧米系留学生に比べ、アジア系留学生の満足度が低い傾向が見られるという研究成果もある(横田・小林編 2013)。さらに、早矢仕彩子はたとえ同じ文化圏と言われる中国、韓国、台湾の留学生だけでも適応度が異なると指摘している(早矢仕

1997)。

著者が述べるとおり、これまでの留学生研究では、欧米諸国の留学生とアジア系の留学生を同一視して考察するものが多い。2008年以後、来日留学の外国人学生が急増し、とりわけ中国からの留学生数の増加率は非常に高い。このような状況において、異文化適応の研究は研究対象の出身地域を限定して行わないと、一致した結果が得られにくいのではないかと考える。以上のことから、来日する留学生が増加し、その留学目的も多様化している現在でも、出身地域を限定して研究を進める意義が大きいと評者は考える。

### 3.2 個人属性および留学動機と適応の関係性への着目

中国人留学生の個人属性を整理し、それに加えて半構造化インタビューを用いて留学動機を把握することを通して異文化適応との関係を明らかにした点も本書の優れた点だと評者は考える。これまでの留学生研究は主に在日留学生が置かれた状況をめぐって、いかに留学生を援助すべきかを中心に、日本人側のソーシャル・サポートの必要性を提唱してきた。事例を挙げると、岩男寿美子と荻原滋は留学生を対象にして調査した結果、アジア系留学生よりも欧米系留学生のほうが、日本人の親和性を高く評価している。それと同時に、日本語能力が高い者ほど日本人の親和性を低く評価する傾向があることを明らかにしている(岩男・荻原 1997)。また、周玉慧は、留学生が日本という新しい環境に移行した初期段階では、生活面においても、学習面においても直面する困難が大きいと、この時期のホスト国のマジョリティ側からのサポートの提供が異文化適応の促進に結びつく」と指摘している(周 1995)。さらに、田中共子も留学生が日本人と交流するときにソーシャル・スキルの形成は異文化適応に関して重要であり、日本人は留学生に期待する行為もより親密な関係に進むに伴って日本人的な価値観と人間関係の築き方の習得を望まれる一方、現実的には難しい部分を述べている<sup>1)</sup>。

このように、留学生の社会的関係を支援する日本人側の行為を社会心理学的な視点から着目する研究は大きな意義がある。しかし、グローバル化の進行と社会の発展によって、来日留学する外国人学生が増加しつつある今日では、留学動機が多様化かつ複雑化している。著者は第2章で中国人留学生に対する半構造化インタビューの結果、多くの中国人留学生の動機は学歴の取得と留学経験の獲得であることを明らかにしている。また、留学に伴う移動は自発的な行為であるが、中国人留学生の場合は、内発的動機よりも外発的動機によって留学してきた部分が多い。そのため、留学生の留学目的と動機の違いによってホスト社会に対してネガティブな感覚が生じることを指摘した(本書：68)。

したがって、単に留学生の内面的な部分から適応問題を考えるのではなく、留学生の留学動機、文化背景、個人属性などを踏まえながら総合的に考察する必要がある。著者はこれまで十分に討論されることがなかった中国人留学生の複雑な留学動機を把握することで、彼らが異

1) 田中共子は、留学生側は言語力をより速く向上することを目的にして日本人と接触するが、日本人側では、日本語をうまくしてから友達になろうという考えを持っていることを明らかにしている(田中 2000)。

文化を適応する過程の中に問題が発生する要因を提示した。この着眼は来日留学の社会背景と留学生の個人属性が変化している現在においても適用できるだろう。

### 3.3 留学前の対ホスト国の理解と適応に与える影響

中国人留学生の留学前後における対日イメージの変化から異文化適応に対する影響を考察した著者の研究は非常に優れたものだ。本書は中国人留学生に対する半構造化インタビュー調査を通して、留学後に一定の時期を経過すると、個人属性と留学動機の違いにかかわらず、対日イメージが著しくネガティブになっていたことを明らかにした。その原因として留学の前には留学先に対する関心の高さによって高まった対ホスト国のイメージが、留学後に修正された点が指摘された。さらにカルチャーショックや自国に対する再認識が行われることも大きな影響を与えたと指摘されている（本書：90）。中国人留学生が国内で日本に対するステレオタイプや期待が来日以後の適応度を影響する。こうした知見は、その影響の根拠を提供し、研究として有益なものとなっている。

### 3.4 本書の有用性

本書の有用性について、主に二つの点から整理できる。第一は、近年の来日留学が低年齢化に進展し、高卒後に直接来日留学の中国人留学生は急増し、大学院留学の場合も、中国で大学を卒業後すぐに来日する人が多くなっている（張 2012）。また、近年中国人学生が来日留学する動機要因は（1）国内高等教育の大衆化に伴う質の低下（2）名門校をめぐる進学競争の熾烈化の回避（3）労働市場の留学経験者に対する優遇（4）一人っ子を中心とする家族構成による海外留学の経費支弁能力の向上にまとめられる（李 2016）。このように、近年においても、中国人留学生の留学動機は依然として複雑である。

第二は、情報化社会の発展と情報機器の発達により、留学生は来日する前にも、日本に対するイメージが従来のステレオタイプのイメージからより具体的かつ客観的になっている。実際に日本のサブカルチャーに大きな関心を持って日本に来た留学生も増加している。しかし、留学前に日本に対する理解は表面に見える文化がほとんどで、日本に来た後に日本社会と日本人との接触によって価値観や空気などの見えない文化を習得していく。その過程の中に、カルチャーショックを受けた人も少なくない。したがって、留学生の来日前後イメージの変化という研究手法は今日でも有用性があると考えられる。以上の二点から、近年の来日留学の社会背景が変化していたとしても、本書で著者が提示している留学動機と留学前後における対日イメージの変化から留学生の異文化適応を研究する着目点は大きな意義があると考えられる。

## 4 本書の課題

本書では、中国人留学生を対象に取り上げ、個人および対日イメージの変化を用いて考察し、留学生は留学期間中にホスト国に対する態度がネガティブになっていることが適応に大き

く影響する要因として提示した。従来の留学生適応問題は、主に日本社会への参入や日本人と交流するとき起きたカルチャーショックによって日本と日本人に対するイメージと態度がネガティブになることが要因であると捉えられてきた。しかし、現在では、中国人留学生は留学の初期段階でエスニック集団を形成し、中国人同士間の生活が安定化していると同時に、ソーシャルメディアや情報機器の影響が加わって、留学生は日本と日本人に対して無関心な状態になっている。よって、交流する意欲がない結果に至ったとも考えられる。そのために、評者は(1) ホスト社会マジョリティと異なる異質集団としての留学生が持つエスニック・アイデンティティの影響 (2) ホスト社会に移住する初期段階に外部環境が移住者の人間関係とその親密性に及ぼす影響 (3) 情報化社会の発達による交流の閉鎖性という三つの社会学的な視点から見ると、本書にはいくつかの課題が存在すると考える。具体的には、以下のように指摘できる。

#### 4.1 異質集団としての中国人留学生

本書では、中国人留学生の異文化適応が低下する原因として、(1) 中国人留学生は日本留学期間中に複雑な留学動機によって留学満足度が低い (2) 語学力の不足のために交流の時に支障が出る (3) 留学前後に対日イメージの変化が留学生に大きなギャップを感じられるという三つの点を提示した。しかし、著者の分析は主に個人的側面から展開しているものであり、集団的側面に基づく異文化適応のあり方が十分に提示されていない。その理由は二つがある。第一に、本書の研究結果をみると、中国人留学生の異文化適応問題は個人的要因が大きい。すなわち、ホスト社会である日本に滞在している中国人留学生という移住者集団は異質な性格を持っていると考えられる。その異質性をいかに定義し、捉えるかは異文化適応の類型に着目する必要がある。

異文化適応は基本的にアシミレイションとアカルチュレイションの二つのパターンがある。水上徹男によると、前者は移民と難民などのホスト社会支配集団の一員になることを志向し、移住したもので、ホスト社会支配集団と区別不可能になるために自文化を変容させ、同化を目指す適応のことである。後者は留学生や多国籍企業の海外滞在授業員など、ホスト社会に一定の期間しか滞在しない集団が、移住の期間中に順調に生活することや学習目標を完成できるようになるために、ホスト社会支配集団の言語と社会規範の理解と習得を目的としたものである。したがって、エスニック・アイデンティティと文化慣習などの個人内面的な部分を変える必要はない(水上 1996)。つまり、留学生のような移住者グループはホスト社会に移住しても母国のエスニック・アイデンティティを保有している。そのために、自分と異なる文化を持つホスト国のマジョリティと接触するよりも、生活様式と価値観が一致する留学生同士と交流するほうが帰属感と安定感が得られる。これは中国人留学生が留学生同士集団内部に親密な関係を形成する重要な一因であろう。

第二に、著者は中国人留学生の異文化適応度に影響を与える一つの原因として、中国人留学生数は全体の半分以上を占めていたため、どうしても中国人同士の付き合いが増えてしまうと軽く述べた(本書：68)。しかし、留学生同士の親密な人間関係を形成し、一つのエスニック

集団になることによって異文化適応に対する影響を指摘していない。エスニシティの視点から見ると、出自が共通する個人がともに異なる環境に遭遇するときに、内的凝集力の強いエスニック集団を形成する（青柳 1996）。エスニック集団を形成する留学生の集団内部での人間関係が固まりやすく、エスニック・アイデンティティを一層強化する役割を果たしている。このように、移民集団を対象にしてエスニシティの視点から異文化適応問題を考察する研究は今では少なくないが、そのモデルが留学生を対象にした研究の中に、十分組み込まれていない。中国において海外留学が容易となり、留学生が急増し、留学期間も長くなりつつある現在、中国人留学生を対象に、エスニシティの視点から、エスニック集団の形成過程を捉えること、そして、それが集団構成員の異文化適応に与える影響を研究することが非常に重要な課題であろう。

#### 4.2 留学初期段階の環境と異質集団の形成

本書では、中国人留学生が来日後に遭遇した不公平やギャップ感は適応に大きな影響を与えることが提示された。また田中共子は、留学生の異文化適応性を向上させるには、初期段階でのソーシャル・サポートが極めて重要で、その段階を見すごすと、後でいくらサポートしても大きな効果がないと述べている（田中 2000）。しかし、著者は中国人留学生の異文化適応を考察するときに、来日後の初期段階に対する分析が不足していると考える。まず、本書では、十万人留学生計画の実施以降、私費留学が急増した背景のもと、来日初期における中国人留学生の日本語学校での学習と生活状況についての調査が行われていない。また、第3章では、日本へ留学するための事前語学研修を受けていた中国人学生を対象に、対日イメージの変化および対ホスト国の友人関係が調査されたが、その期間中に留学生同士の人間関係について触れていない。ではなぜ、中国人留学生の異文化適応を考察する際に、留学初期段階での学習・生活環境と留学生同士の人間関係を重視する必要があるか。前節で述べたように、多くの中国人留学生はエスニック・アイデンティティを保有しながらエスニック集団を形成し、生活することで異文化適応性の低下をもたらした。そして、来日初期の日本語学校での滞在経験は異質集団の形成の源であり、大学や大学院に進学する後も留学生の異文化適応に大きな影響を与えられられる。その理由について、これまでの研究を踏まえながら、以下のように述べる。

日本に来る留学生の中に、日本語学校生は大学生に比べ、否定的経験が多く、日本人との友人関係が希薄で日本人と交流する意欲も低い（山崎ほか 2000）。そして来日初期段階の留学生は日本社会との関わりが限定されているため、基本的に身近な日本語学校を中心に留学生生活を体験する（梁 2014）ため、留学生の人間関係は同国の友人に固まりやすい傾向がある（横田 1992）。また、私費留学生の中に、日本語学校を卒業後、大学や大学院に進学する学生は多い。彼らは日本語学校に滞在する期間に語学力のほかにも受験勉強をしている（張 2012）。そのため、来日留学初期段階では、中国人留学生は生活の不安と進学の圧力の影響により、相対的に閉鎖的な環境に生活し、留学生同士の関係が固化する傾向が見られる。一方、これまでの多くの研究では、中国人留学生が留学初期段階での遭遇と経験が彼らの留学生活と人間関係に影響

を与えることはすでに指摘されていた。しかし、その人間関係によって形成された留学生ネットワークが中国人留学生の異文化適応に対する影響について、また十分に議論されていない。

この留学の初期段階で留学生同士のエスニック集団内部での生活は安定化すると、大学や大学院に進学した後も、新たな留学生同士エスニック集団を形成する可能性が高いと想定できよう。すなわち、留学生の異文化適応に関しては、留学の初期段階における留学生同士の親密な人間関係の形成から集団形成までのプロセスを把握し、その集団認識から異文化適応を検討する必要がある。そのために、留学生に対する質問紙調査、あるいはインタビュー調査を行う際に、現在の友人関係の形成は日本語学校での人間関係に影響されるか否かを着目し、研究を進めることが不可欠であろう。

### 4.3 情報化社会の発達と留学生の集団意識

本章では、中国人留学生は同じ留学生同士の集団内部における親密な関係を築きあげたという異文化適応の課題に対して、集団内部のエスニック・アイデンティティと留学初期段階の外部環境が与える影響について着目すべきだと評者は論じた。しかし、現代社会において、ソーシャルメディアの発達が及ぼす影響も一つの無視できない要因だと考えるが、本書では、この点についてほぼ言及していない。もちろん、著者は本書を執筆する当時では、ソーシャルメディアはまだ今日のように普及していないため、この要素についての分析がないことは当然なことだと思われる。だが、情報化社会が発達している現在、若者の生活の中に不可欠なものとなっているソーシャルメディアが留学生の異文化適応に与える影響に目を向ける必要があると考える。

では、ソーシャルメディアが留学生の異文化適応にどのような影響を与えるか、あるいはどう位置付けられるか。李文によれば、現代コミュニケーション技術の進展に伴って発達しているソーシャルメディアは時間的かつ空間的の距離を打破し、留学生たちは海外に行っても自国と強いつながりを保有できるようになった。また、昔と今の在日留学生の社交圏を比較すると、昔では、通信手段の制限により、留学生同士の付き合いのほか、日本人との交流も積極的な面が見られる。それに対して、現在では、情報機器の発達によって、ソーシャルメディアを通して自国の友人との交流と情報交換が頻繁になる一方、日本人との交流が激減しているのが現状である(李 2015)。さらに、中国は Facebook や Twitter などの主流ソーシャルメディアに対する規制によって、ほとんどの中国人留学生は中国系のソーシャルメディアに対する依存性が高い。佐々木によると、各国の留学生の SNS 利用実態を考察した結果、中国人留学生には中国系のソーシャルメディアがよく使われていることがわかった。また、ほかの国からの留学生に比べて中国人留学生は、日本にいても同国人や出身国で中国を意識することが多いことが推察され、中国人としてのアイデンティティが意識的、無意識的に関わらず日々の SNS の利用を通して顕在化する結果になっている(佐々木 2015)。このように、ソーシャルメディアは一種の留学生のエスニック・アイデンティティおよび留学生同士が親密な関係を結びつく意欲を増幅させる装置になっていると評者は考える。この装置の作用によって、普段の生活にお

いて、留学生同士や国内の友達と交流する時間が昔の留学生と比べてはるかに増加したため、人間関係が一層、留学生同士グループの中に限定されたと見られる。

## 5 おわりに

90年代から2000年代初期までの来日する中国人留学生の異文化適応問題は主に日本での生活の中に遭遇した不平等やカルチャーショックによるものである。一方、2008年以後、中国における留学ブームの影響と日本政府の留学生受け入れ政策の緩和によって、日本に留学する中国人留学生は低年齢化すると同時に人数も急増している。近年、中国人留学生にめぐる異文化適応問題は以前と比べ、カルチャーショックの衝撃よりも、留学生同士がグループを形成してその中に生活を完結する傾向がみられる。本稿の対象書籍は政策変更以前の中国人留学生に注目して考察したものである。そして評者はそれを評価すると同時に、政策変更以後の現在における中国人留学生の異文化適応に注目しつつ、第四章で本書の課題を示した。

中国人留学生にめぐる異文化適応の問題点はなぜ変化したのか。その差異は情報の取得が容易になることと来日留学する人数が急増したことであると評者は考える。以前は、日本に留学しに来た学生らは日本に対するイメージが不完全で、順調に留学生活を送るためには、積極的に日本人と交流し、日本社会に参入することを通して、必要な情報を手に入れることが要請された。そのために、日本人や日本社会と接触する過程にカルチャーショックを受けて異文化適応の問題が起きた。一方、現在では、情報化社会の発展により、留学生らは手軽に自分の必要な情報を手に入れることができる。また、来日する中国人留学生の人数が急増したことを加えて、かつてのように積極的に日本人や日本社会に接触する必要性がなくなりつつあると言えよう。

これまでの留学生研究は個人的な側面から着目し、ソーシャル・サポートの重要性を強調した。しかし、留学生、とりわけ中国人留学生における異文化適応の問題点が過去と大きく異なる現在において、単に個人間のサポートのみではなく、対象が所属している集団やネットワークとその構造を解明が求められる。そのうえで、今日の中国人留学生は具体的にどのような場合に異文化を適応する必要があるかを明らかにし、相応なサポート資源を提供することが重要だろう。

### 【参考文献】

- 青木保, 2001, 『異文化理解』 岩波新書。  
青柳まちこ編・監訳, 1996, 『「エスニック」とは何か——「知」の扉をひらく エスニシティ基本論文選』 新泉社。  
岩男寿美子・萩原滋, 1997, 「在日留学生の対日イメージ(12)——第3次調査(1995年)の枠組みと結果の概要——」『慶應義塾大学新聞研究所年報』 47: 1-28。  
早矢仕彩子, 1997, 「外国人就学生の自己認知、自・他文化への態度が適応に及ぼす影響」『心理学研究』 68: 346-354。

- 近藤裕, 1981, 『カルチャ・ショックの心理——異文化とつきあうために』 創元社.
- 田中共子, 1997, 「在日留学生の異文化適応——ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から——」『教育心理学年報』 37: 139-143.
- 田中共子, 2000, 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』 ナカニシヤ出版.
- 張梅, 2012, 「私費留学生の進学意識と進路決定——日本語学校在籍者へのインタビュー調査から——」『東京大学大学院教育学研究科紀要』 52: 169-181.
- 周玉慧, 1995, 「受け取ったサポートと適応に関する因果モデルの検討—在日中国系留学生を対象として—」『心理学研究』 66: 33-40.
- 原田登美, 2013, 『留学生の動機とホームステイ——ソーシャル・サポートによる異文化適応へのプロセス』 ふくろう出版.
- 水上徹男, 1996, 『異文化社会適応の理論——グローバル・マイグレーション時代に向けて』 ハーベスト社.
- 李文, 2015, 「中国人留学生の友人ネットワーク」『同志社社会学研究』 19: 47-63.
- 李敏, 2016, 「中国人留学生の日本留学決定要因に関する研究——Push-and-Pull モデルに基づいて——」『広島大学高等教育研究開発センター大学論集』 48: 97-112.
- 梁惠, 2014, 「日本語学校に在籍する中国人留学生のストレスとメンタルヘルス——社会環境ストレスに焦点を当てて——」『立教大学臨床心理学研究』 8: 33-44.
- 山崎瑞紀・倉元直樹・中村俊哉・横山剛, 2000, 「アジア出身日本語学校生の対日態度及び対異文化態度形成におけるエスニシティの役割」『教育心理学研究』 48: 305-314.
- 横田雅弘・小林明編, 2013, 『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』 学文社.
- 横田雅弘, 1992, 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』 5: 81-97.